

Padlet を活用した海外大学との相互学習プロジェクト

A Mutual Learning Project with an Overseas University Using Padlet

安田有紀子

Yukiko YASUDA

(要旨)

本稿では、2021年9月に開始した米国コロンビア大学日本語入門クラスの学生と Padlet を活用した相互学習プロジェクトについて、プロジェクト発足に至る経緯、プロジェクトの概要および活動内容、学生アンケート結果について報告する。

キーワード：相互学習、言語学習、内発的動機付け、Padlet、英語プレゼンテーション、オンライン交流

Key Words : Mutual learning, language learning, intrinsic motivation, Padlet, presentation in English, online interaction

1. はじめに

本稿では、2021年9月に開始した米国コロンビア大学日本語クラスと有瀬キャンパス神戸学院カレッジ生1回生および2回生有志による、Padlet を活用した相互学習プロジェクトについて、プロジェクト発足に至る経緯、活動内容、学生アンケート結果について報告する。

2. 相互学習プロジェクト

2. 1. プロジェクト発足の経緯

本プロジェクト発足のきっかけは、2021年7月下旬、コロンビア大学で日本語を教える高橋知佳子先生よりプロジェクト参加へのお誘いをいただいたことであった。高橋先生にとって2021年度はコロンビア大学で教鞭をとられる初年度であり、本プロジェクトも初めての試みであった。担当する日本語入門クラスの授業計画に日本人学生との相互学習を取り入れ、プロジェクトの内容を成績評価の一環として扱うこととされた。授業計画にあった活動を可能にするために、日本で英語を教える教員とその学生を探されており、筆者がその打診を受けた次第である。

プロジェクト開始前8月から9月にかけて、メールやZoomでプロジェクトの概要説明、活動内容やテーマ、プロジェクトの進行計画について何度も打ち合わせを重ねた。一時はコロンビア大学側で開講可能となる履修登録者数を満たせるかどうか危ぶまれたが、最終的に16名の履修者が確定した。それを受けて本学側でも同等の人数を調整するため、有瀬キャンパス神戸学院カレッジに所属する学生から希望者を募ったところ、1回生8名、2回生3名計11名の有志が集まり後期授業開始とともにプロジェクトが開始された。

2. 2. プロジェクトの目的

本プロジェクトの主な目的は、1) 学習者が個人的に興味をもつ事柄について、学習している言語を使用してコミュニケーションをとる機会を提供すること、2) 自主的な学習リソースの探索を奨励することによって、自律的な学習者を育成することである。1) については詳細を後述するが、神戸学院生は英語を用い、コロンビア大学の学生は日本語を用いてオンライン上で双方向にやりとりを行える機会を提供している。2) では相手に紹介するトピックや内容について自ら考え、様々なリソースを活用しながら相手への伝え方を工夫できるよう促し、学生はプレゼンテーションの作成を行った。

また、言語学習においては学習者の内発的動機付けの重要性が指摘されている。Dörnyei & Ushioda (2011) によると、動機付け理論では大きく分けて外発的動機付けと内発的動機付けの2種類に分類される。前者は報酬、評価、罰といった外部からの働きかけによる動機付けであり、後者は喜びや好奇心を満たしたり、楽しみや満足感を得たりするなど、自身の内面から起こった興味や意欲による動機付けのことである。動機付け研究において、内発的動機付けは外発的動機付けよりも高い学習効果やパフォーマンスが得られることが先行研究で示されている (Deci & Flast, 1995; Deci & Ryan, 2002; Dörnyei & Ushioda, 2011; Nakata, 2006)。これら2種類の動機付けをそれぞれ対立するものではな

く、外発的動機付けから内発的動機付けへ至る変化の過程を捉えたのが自己決定理論(Deci & Ryan, 2002)である。

Deci & Ryan (2002) は、外発的動機付けから内発的動機付けまでを、①外的な報酬や罰などにより意欲が決定される外的調整、②自分の評価を意識したり、やらなければならないと義務を感じて行動する取り入的調整、③外的な要因から影響を受けつつも行動の必要性を認識している同一視的調整、④外的な要因を受けて始めた行動が自身の目的や欲求と価値が一致してくる状態となる統合的調整、⑤やりがいや楽しさを感じて自ら主体となって行動する内発的動機付けの状態に至る5段階に分けている。これら5つの段階は、自律性、有能性、関係性の3つによって支えられており、これら3つの欲求が満たされることで内発的動機付けが促進される(Deci & Flast, 1995; Deci & Ryan, 2002)。自律性は、自らの行動を選択し自発的に行うことである。有能性は、自分には能力があると考えることであり、活動を通して達成感が得られれば有能感も高まる。関係性とは他者との関わりや連帯感を指す。

本プロジェクトでは、それぞれが学習する言語を使用する国に住む学生とオンライン上で交流する機会を通して、授業で学ぶ文法構造やフレーズだけでなく、ネイティブの使用できる言葉に触れることができる。実際に交流の機会を持つことにより、言語学習への内発的動機付けを促すことも本プロジェクトの重要な目的である。

2. 3. プロジェクト概要

今回、プロジェクトのテーマとして「My Favorite Place (お気に入りの場所)」を取り上げた。本学の学生は英語で、コロンビア大学の学生は日本語で、それぞれが学習する言語を使用し、テーマにそって2～5分程度の短いビデオを作成した。コロンビア大学の学生が作成した日本語のプレゼンテーションに対して本学の学生が日本語で、反対に本学の学生にはコロンビア大学の学生は英語で質問やコメントを添えるといったように、相手が学習している言語でやりとりを交わす取り組みを行った。なお、本プロジェクトにおけるすべてのやりとりはPadletを用いて行われた。

Padletとは、シンガポールと米国を拠点とする会社が作成したオンラインツールである。無料で使用が可能であるが、無料プランの他に学校向けの機能を充実させたPadlet Backpack、企業向けのPadlet Briefcase、個人利用に適しているとされるPadlet Proの3種類が有料サービスとして提供されている。なお、2021年12月1日現在、無料版では3つまでPadletボードを作成することができる。

図1に示されるように、代表者がPadletボードを作成し参加者の登録を行うと、参加者はボード上で個別のウォールを持つことができる。個人のウォール上で文字を入力したり、ワードやエクセルをはじめ、画像、オーディオファイル、ビデオなどの各種ファイルを貼り付けたりすることが可能であり、ウォール内に記述あるいはアップロードしたコンテンツは意図的に消去しない限り、期間に制限なく存在し続ける。また、互いにオンラインであれば、ウォールへの投稿をリアルタイムで他の参加者が確認することができ、参加者の投稿に対して他者がコメントすることができる。スマートフォンのアプリで無料会員

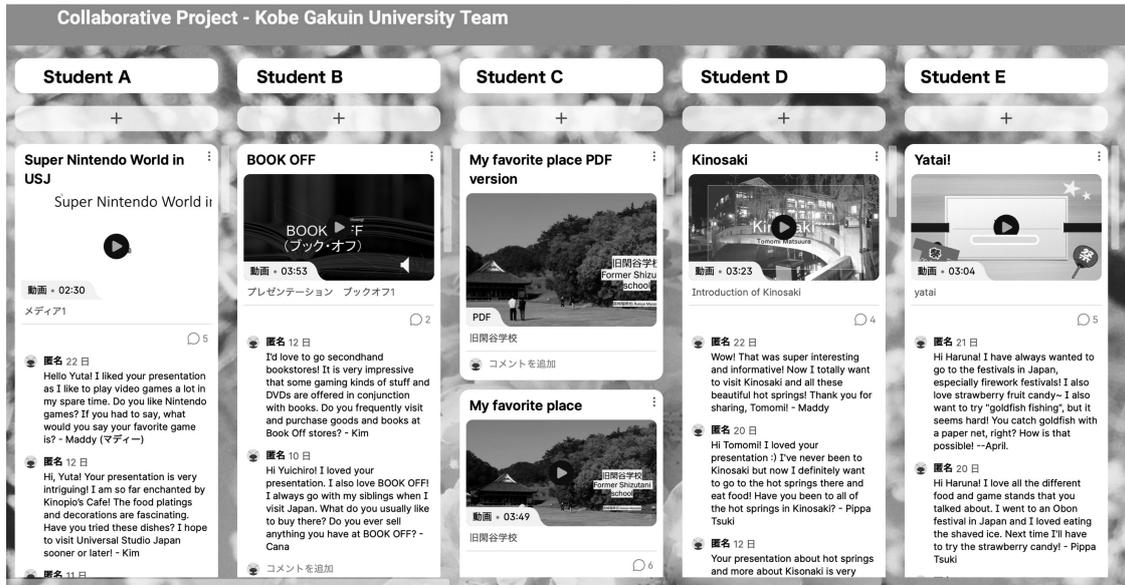


図 1. 神戸学院用 Padlet (一部抜粋)

登録をした学生については、コメント投稿の際に登録した個人名が自動的に現れるが、会員登録なしの利用については図 1 に見られるように、投稿者名は「匿名」として表示されるため、この点は活動の内容（誰がコメントしたのかを明確にしておく必要がある場合など）によって注意が必要である。今回のプロジェクトでは、誰からのコメントであるのかを明確にするために、コメント内に必ず名前を記載することを学生に求めることとした。

2. 4. 活動内容

以下の表 1 は本プロジェクトの活動内容をまとめたものである。なお、プロジェクトは本稿執筆時の 2021 年 12 月 1 日現在も進行中である。

表 1. プロジェクトの活動内容

期 間	コロンビア大学日本語学習者	神戸学院大学英語学習者
2021年9月中旬～下旬	<ul style="list-style-type: none"> ●プロジェクト概要説明 ●テーマについて意見交換 ●使用する表現についてグループでブレインストーミング 	<ul style="list-style-type: none"> ●プロジェクトについて周知 ●参加希望者の募集 ●参加希望者の決定 ●プロジェクト概要説明 ●自己紹介の英文作成
9月下旬～10月上旬	<ul style="list-style-type: none"> ●紹介する場所を決定し出来る限り日本語を使って草案をまとめる。 ●草案に対して教師からフィードバックを受ける。 ●Padlet に自己紹介を日本語で投稿する。 ●神戸学院生の自己紹介文にコメントを添える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自己紹介の英文作成 ●紹介する場所について検討を行う。 ●Padlet に自己紹介を英語で投稿する。 ●コロンビア学生の自己紹介文にコメントを添える。

10月中旬	<ul style="list-style-type: none"> ●ビデオプレゼンテーションの草案をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●紹介する場所について検討を行う。 ●他の参加者と意見交換をしてプレゼンテーマを決定する。 ●引き続きコロンビア学生の自己紹介文にコメントを添える。 ●SE Reading II の履修者4名、日本のお菓子についてプレゼンテーション作成。 ●日本のお菓子紹介プレゼンテーションを Padlet に投稿。
10月下旬	<ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンテーション草案を学生同士で共有し、フィードバックを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●双方の Padlet に投稿されているコメントを確認し、必要であれば返信をする。
11月上旬	<ul style="list-style-type: none"> ●「お気に入りの場所」について、日本語で3分から5分程度のプレゼンテーションビデオを作成し Padlet に投稿する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●コロンビア側に投稿されたビデオを視聴し、日本語でプレゼンテーションに対する質問やコメントを添える。
11月中旬	<ul style="list-style-type: none"> ●双方の Padlet に投稿されているコメントを確認し、必要があれば返信をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「お気に入りの場所」について、英語で2分から5分程度のプレゼンテーションビデオを作成し Padlet に投稿する。
11月下旬	<ul style="list-style-type: none"> ●コメントを添える際に使える表現を授業内で確認する。 ●神戸学院側に投稿されたビデオを視聴し、英語でプレゼンテーションに対する質問やコメントを添える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンテーションビデオに対して投稿されたコメントを確認し、必要であれば返信をする。
12月上旬	<ul style="list-style-type: none"> ●双方のコメントを確認し、コメントの少ない学生にコメントや質問を添える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●双方のコメントを確認し、コメントの少ない学生にコメントや質問を添える。
12月中旬～授業最終日	<ul style="list-style-type: none"> ●双方のコメントを確認し、必要があれば返信する。 ●プロジェクトの取り組みを振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●双方のコメントを確認し、必要があれば返信する。 ●プロジェクトの取り組みを振り返る。 ●アンケート調査

表1で示された通り、プロジェクトの初段階として、まずは互いの学習言語で自己紹介を投稿し、コメントや質問を添えた。その際、コロンビア大学側では成績評価の観点から「最低でもコメントと質問それぞれ2つずつ投稿する」という条件が添えられていたが、本学側は本プロジェクトへの参加を成績評価に含めていないため特に投稿数について条件は設けなかった。その一方で、海外で暮らす大学生と交流を持つことができる大変貴重な経験であることから、出来る限り多くのコメントを投稿するよう促した。

プロジェクト開始当初は、「My Favorite Place (お気に入りの場所)」についてのみビデオプレゼンテーションを作成する予定であったが、参加者のうち SE Reading II を履修している4名とプロジェクトについて意見交換を行い、日本語を学習するコロンビア大学の学生にもっと日本に興味を持ってほしいという願いから、4名の学生が好きな日本のお菓子についても紹介ビデオを作成することにした。SE Reading II の授業時間の一部を使い、紹介するお菓子の選択、プレゼンテーションで使用する英文作成、フィードバックを行った後に各自でビデオ作成に取り組み、Padlet 上に投稿した。

「My Favorite Place (お気に入りの場所)」のビデオプレゼンテーションにおいては、双方ともに充実したコメントのやりとりが行われた。本学側では、受け取ったコメントや質問で使われていた英文の中に今まで知らなかった英語表現などを見つけ、自ら調べて理解する姿勢が見られた。また、コロンビア大学側に対して質問やコメントを添える際、漢字の横にひらがなで読み方を添えるなど、相手の日本語学習をサポートしようとする配慮や表現の工夫がなされていた。

本稿執筆時もコメントや質問の交換は継続している。また、コロンビア大学の学生が、 Semester 終了後に本学の学生と Zoom などを用いてリアルタイムで話す機会に関心を示していると高橋先生より連絡をいただいた。プロジェクトに参加した本学の学生もさらなる交流を望んでいるため、今後の実現に向けてプロジェクトを進めていきたい。

3. 学生アンケート結果

本プロジェクトへの参加について神戸学院カレッジ生11名に対してアンケート調査を行った。アンケートは Google Form で作成したものを利用し、5 件法および自由記述を含む10項目をもとにプロジェクト参加の感想、プロジェクト参加前後の自身の変化、プロジェクトへの自身の貢献度、改善点等について調査した。倫理的配慮として、本アンケート調査結果の用途と匿名性の確保についての説明文を添え、アンケートの趣旨を理解した上で参加に同意し、アンケートへの回答を続けるか否かを問う項目を設け、その回答をもって同意を得た。

設問1「コロンビア大学との相互学習プロジェクトに参加してよかったと思う」に対して、6名(54.5%)の学生が「そう思う」、4名(36.4%)が「ややそう思う」、1名(9.1%)が「どちらでもない」と回答した。設問2で回答の理由を尋ね、その結果について類似表現をまとめた上で表2に示す。

表2. 設問1 回答理由

<p>「そう思う」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意思疎通を図ることで適度な緊張感があって英語で文章を作ることを身近に感じた。 ・国際的な交流ができ、日々の英語の勉強が活かされる経験になった。 ・同年代の学生と英語で交流する貴重な機会に恵まれた。 ・英語を学ぶモチベーションが上がった。
<p>「ややそう思う」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロンビア大学の人と関わりをもてた。 ・語学を学習する海外の方と交流することができて新鮮だった。 ・相互学習をすることで良い刺激を与えてもらった。
<p>「どちらでもない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間がなくてあまり参加できなかった。

設問3「自身のプロジェクトへの貢献度を1(低い)～5(高い)で示してください」では2名(18.2%)が「2」、4名(36.4%)が「3」、5名(45.5%)が「4」を選択した。設問4では設問3の回答理由を尋ね、その回答結果を表3にまとめた。

表3. 設問3回答理由

<p>「4 (やや高い)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・完璧ではないが、日本の場所について良いプレゼンができたと思う。 ・コロンビア大学の生徒からのフィードバックに対する回答や、場所を紹介するためのPPT制作において伝えたいことを伝えられた。 ・もう少し積極的にコメントをするべきだと感じた。 ・多くの人にコメントすることが出来たが、コロンビア大学の学生からのコメントに対しての対応が滞っている。 ・プロジェクトのテーマ以外にお菓子の紹介もできた。
<p>「3 (どちらでもない)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・返信できていたりできていなかったりした。 ・コロンビア大学の人たちがつけてくれたコメントに返信するのが遅くなってしまった。 ・なかなか上手にプレゼンが作れなかった。 ・プロジェクトの存在を時々忘れてしまっていたので、返事をすぐに返せなかった。
<p>「2 (やや低い)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトの存在を時々忘れてしまっていたので、返事をすぐに返せなかった。 ・あまり会話ができなかった。

設問5から9は自由記述回答形式でアンケートを行った。それぞれの設問への回答について類似の内容についてはまとめているが、主な回答を表4にまとめる。

表4. 自由記述設問と主な回答

<p>設問5 プロジェクトへの参加はご自身の英語力にどのような影響を与えましたか。具体的な例があればそれも含めて書いてください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・相手方の表現を見て自分の表現を見直すことができた。 ・英語で表現することは苦手だったが、時間をかけながらもできるだけ簡単な表現で伝えることができた。 ・日常的に使う挨拶文や文章の書き方、話し言葉について知ることができた。 ・コロンビア大学の学生さんに良い影響を与えてもらっただけでなく、カレッジに参加している学生で、ネイティブのように発音している人がいて、自分もこんな風に話せるようになりたいなど良い刺激ももらった。
<p>設問6 プロジェクトへの参加はご自身の英語学習へのモチベーションにどのような影響を与えましたか。具体的な例があればそれも含めて書いてください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・現地の大学生と関わったことで自分の英語力でもコミュニケーションをとることができるということが分かったのでモチベーションが上がった。 ・英語をさらに流暢に話せるようになりたいと感じるようになった。 ・自分の英語がコロンビア大学の人たちに伝わって、コメントをつけてもらえたときはとても嬉しかったので、もっとスムーズに会話ができるようにもっと英語力を鍛えたいと思った。 ・コロンビア大学の人が日本語を頑張っているように、自分も英語をもっと頑張ろうと思った。 ・自分と同じように外国語を学んでいる学生がいることで、自分も頑張らないといけないと思えました。
<p>設問7 今回のプロジェクトの良かったと思う点を書いてください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の英語力を試す機会になった。 ・コロンビア大学の学生と関わりをもてた。 ・海外で流行しているものや現地のおすすめの場所など幅広く情報を得られた。 ・実際に海外の大学生と交流することで、もっと英語力をあげたいという気持ちが高まった。また、日本語を学人たちに伝わりやすいように工夫して日本語の文章を作ることも今まで一度もやったことがなかったので面白かった。 ・日本語と英語、両方の言語を使ってやりとりができた。

設問8 今回のプロジェクトの改善すべき点を書いてください。

- ・コメントの返信で匿名になってしまっていた。
 - ・チャットがLINEのようなシステムであるともっとやりやすい。
 - ・Padlet がちょっと手間取った。
 - ・コメントへの回答が遅くなりすぎている。
 - ・自分の投稿にコメントが来た時に通知がくるともっとやりやすくなる。
 - ・直接会えなくても Zoom などを使ってリアルタイムで交流もしてみたい。
-

設問9 今後、このプロジェクトを通してコロンビア大学の学生とやってみたいことを書いてください。

- ・Zoom などを使ってリアルタイムで会話。
 - ・難しいと思うが共通の趣味について語り合いたい。
 - ・引き続き、動画を使ったプレゼンテーション。
-

設問10 「今回不参加の人や後輩はこのプロジェクトに参加した方が良いと思いますか」では、3名(27.3%)が「そう思う」、8名(72.7%)が「ややそう思う」と回答した。

4. 考察とまとめ

本プロジェクトでは、参加者の言語学習への内発的動機付けを促すことを目的の一つとしていた。学生アンケートの結果をみると、プロジェクトへの貢献度を問う項目で、貢献度は「やや高い」を選択し、その理由として「プロジェクトのテーマ以外にお菓子の紹介もできた」との回答があった。学生は、教員側から提示されたテーマとは別に、コロンビア大学の学生が日本により興味を持つことができるよう、日本のお菓子を紹介することを提案し、各自で選んだお菓子についてのビデオの作成を行った。このように自ら行動を選択し自発的に活動を行っており、回答にあったように、その活動に対する自らの貢献度を評価する姿勢が見られた。

また、プロジェクトへの参加が自身の英語力やモチベーションに与えた影響について問う項目では、「英語で表現することは苦手だったが、時間をかけながらもできるだけ簡単な表現で伝えることができた」や「現地の大学生と関わったことで自分の英語力でもコミュニケーションをとることができるということが分かったのでモチベーションが上がった」との記述があり、英語を使った実際のコミュニケーションを経験することを通して、英語で意思疎通ができるという自身の能力を実感できたことが示された。

さらに「コロンビア大学の人日本語を頑張っているように、自分も英語をもっと頑張ろうと思えた」や「自分と同じように外国語を学んでいる学生がいることで、自分も頑張らないといけないと思えました」との回答から、同じように外国語を学んでいるという連帯感を感じたり、「コロンビア大学の学生さんに良い影響を与えてもらっただけでなく、カレッジに参加している学生で、ネイティブのように発音している人がいて、自分もこんなふうに話せるようになりたいなど良い刺激をもらった」のように、仲間との関わりを通して学習意欲に変化が生じたこともわかった。

内発的動機付けの促進には自律性、有能性、関係性が満たされることが必要である(Deci & Ryan, 2002) が、アンケート結果から、自主的に活動を選択してビデオ作成をする自律

性、英語でコミュニケーションをとることができたという有能性、他者との連帯感や他者から良い影響を受けるといった関係性が、学習へのモチベーション向上を支えていたことが明らかになった。

今回、プロジェクトに参加した11名は、英語力向上に力を入れている特別プログラム「神戸学院カレッジ」に所属しており、もとより英語学習へのモチベーションは高い学生たちである。教員からプロジェクト参加への呼びかけを受けた際、海外の大学生と英語と日本語を使って交流できる貴重な機会であることを学生に伝えており、プロジェクトの概要を把握した上で学生は参加を希望した。これは Deci & Ryan (2002) の自己決定理論の枠組みで示すと、教員からの参加要請という外的な統制を受けつつも、行動の価値や必要性を認識している、同一視的調整の段階であったと考えられ、外発的動機付けは比較的高かったことが窺える。しかし、アスコー (2013) の「どんなに明確な英語学習の目的があり、目標を詳細に設定し意欲的に始めた学習でも、目標がある程度達成されたり、もしくはある一定期間が過ぎたりすると学習意欲は低下してくることがある。更に目標に近づく為には、学習意欲を再度高め、また維持する必要がある」という指摘の通り、学習意欲やモチベーションは常に一定ではないため、学習の過程においてモチベーションを高めたり、維持するための要素が必要となる。その要素として、本プロジェクトを実施し英語学習への内発的動機付けを促すことを目的の一つとした。上述の通り、プロジェクト開始当初は同一視的調整段階にあったと考えられるが、「実際に海外の大学生と交流することで、もっと英語力をあげたいという気持ちが高まった」や「英語をさらに流暢に話せるようになりたいと感じるようになった」との回答にあるように、海外の大学生と交流するという行動の価値や英語学習への必要性を認識し、さらに英語力向上や学習への欲求が高まっており、活動を行う中で自律性、有能性、関係性も感じることであったことから、プロジェクトへの参加を通して同一視的調整から統合的調整段階に近づいたことが示唆された。

また、プロジェクト全体を通してコロンビア大学の学生と関わることであったことに大きな満足感を抱いていることがわかった。特に、今回参加している1、2回生は大学入学時よりコロナ禍の影響を大きく受けている学年である。大学入学後に描いていた語学研修への参加や海外旅行の夢が叶えられずにいたところ、オンライン上ではあるが海外の大学生と関わりをもてたことは彼らにとって非常に意義深いことであったようだ。その一方で、リアルタイムではないコミュニケーションに少なからずフラストレーションを抱え始めていた。今回プロジェクトで使用した Padlet の特性上の問題もあるが、お互いのコメントへの返信に気づくのが遅く、コメントを受け取ったあとの返信が滞ってしまうことが度々あった。モチベーションの高まりと同時に起こっていた、機械的な問題（コメントを受け取った時に通知がないためすぐに気づくことができない、など）により、やはり Zoom などを用いたリアルタイムでのコミュニケーションへの希望が強くなったことも学生の回答から明らかになった。

海外の大学との遠隔交流で支障となる大きな原因の一つは時差の問題であるが、Padlet などのオンラインツールはリアルタイムではなくとも、お互いの考えや作成したプレゼン

テーションなどを投稿することによって交流の機会を得ることができるというメリットがある。また、初対面の他言語話者と交流の開始段階からリアルタイムでコミュニケーションをとることに對して、参加者が自分の言語能力（特にスピーキング）に不安を感じるなど心理的な負担も考えられることから、今回のように投稿に反応する形で交流を始めることができ、それがきっかけとなって「もっと関わっていききたい」、「リアルタイムでも会話してみたい」という気持ちが高まったことを考えると、オンラインツールを利用した海外の学生との交流を始める際、段階的に交流の方法を変化させていくことで、モチベーションの維持につながるのではないだろうか。

最後に、本稿で示したプロジェクトは今回が両大学の学生たちにとって初の試みであった。プロジェクトは現在も進行中であり、 Semester 終了まで継続する予定であるが、今回のアンケート調査結果から得られた示唆をもとに、今後さらに学生の内発的動機付けを高めることができる質の高い交流につなげられるようプロジェクトを継続していきたい。

謝辞

本プロジェクトは、コロンビア大学の高橋知佳子先生からのお声がけにより実現できました。本学の学生に貴重な経験の機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。また、高橋先生にはプロジェクト期間を通した Padlet ボードの作成、管理および、本稿執筆に際し有益な助言をいただきました。

参考文献

- アスコー朋子 (2013) 「英語クラスにおける学習意欲向上・維持の一考察 —ドルニエイの英語指導ストラテジーを用いた学生・教員両サイドからのパイロット研究」『国際経営・文化研究』17(2), 45–62.
- Deci, E.L. & Flaste, R. (1995). *Why we do what we do: The dynamics of personal autonomy*. New York: G.P. Putnam's Sons.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (Eds.). (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: The University of Rochester Press.
- Dornyei, Z and Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Pearson Education.
- Nakata, Y. (2006). *Motivation and experience in foreign language learning*. Bern: Peter Lang AG, International academic Publishers.